ロンドンの中心部、クラーケンウェル地区にあるインダストリアル・ファシリティのスタジオ。デスクスペースは、壁一面にディーター・ラムスがデザインした「606 Universal Shelving System」を設えて書籍などを収めている。

Well-tempered anonymity.

調律された匿名性。

インダストリアル・ファシリティ

Industrial Facility

Text
Takahiro Tsuchida

Photo
Edvinas Bruzas

Industrial Facility captures context through an architectural perspective, deriving form and function from a pursuit of the essence. Led by Sam Hecht and Kim Colin, the studio crosses their distinct fields of expertise to create furniture and everyday objects that evoke archetypes. By virtue of their perfection, archetypes often take on a sense of anonymity. In their case, this anonymity is underpinned by meticulous insight and a unique depth of experience.

建築的視座からコンテクストを捉え、本質の追求によってフォルムや機能を導き出すインダストリアル・ファシリティ。このデザインスタジオを率いるサム・ヘクトとキム・コリンは、互いに異なる知見をクロスオーバーさせながら、原型を思わせる家具や日用品を数多く手がけてきた。原型はその完璧さゆえに、しばしば匿名性を帯びる。彼らの場合、それは綿密な洞察と独自の経験に裏づけられている。

「君のアプローチはあまりに直接的で本質的すぎるから、プロダクトデザイナーには向いていない」と、サム・ヘクトはモグリッジから言われた。

モダンデザインの洗礼

サム・ヘクトは、手先の器用な子どもだった。電気製品を扱う店を経営していた父親は、客が持ち込んで修理不能だったものを彼に与え、直ったらお小遣いをあげていたという。ヘクトはお金を得ると共に、製品の内部構造に直に触れ、仕組みを理解するようになった。

「安い商品であれば中身も貧弱です。一方でブラウン（Braun）のようなメーカーの製品は、すべてが見事にデザインされ、修理もしやすかった。内側がよければ外側もよくなりえるという事実に気づいたことが、私がデザインに興味をもつきっかけだったかもしれません」

当時、1980年代は、デザイナーのディーター・ラムスがブラウンのデザインを司っていた。「よいデザインは革新的である」「よいデザインは製品を使いやすくする」と始まり、「よいデザインは誠実である」「よいデザインは細部まで一貫している」、そして「よいデザインはできるだけデザインしていない」で終わる有名な10箇条を彼が提唱したのも、ちょうどその頃だ。ヘクトが、ラムスの影響下にあるとも、その継承者だとも思わない。ただし、ラムスをひとつの象徴とする20世紀半ば以降の大きなデザインの流れの先頭に、ヘクトがいることは疑いようがないだろう。

キム・コリンもまた、ヘクトとはまったく違う環境で、早くからすぐれたデザインの洗礼を受けていた。ロサンゼルスで育った彼女の父親は、もともとUCLAのエンジニアで、モダンデザインの愛好家だったという。実験住宅ケーススタディハウスのプロジェクトでも有名な『Arts & Architecture』誌の熱心な読者であり、やがて厳選したミッドセンチュリー家具でインテリアを設えて、誰もが一目置くコレクターになっていった。

「両親の友人だったランドスケープ・アーキテクトのクレオ・バルドン（Cleo Baldon）が、彼らのためにコーヒーテーブルとスツールをデザインしてくれました。細い脚がどうやって巨大な大理石の天板を支えているのかを突き止めようと、テーブルの下を這い回ったのを覚えています」とコリン。彼女は11歳の頃、フランク・ゲーリーの妹のドリーン・ゲーリー・ネルソン（Doreen Gehry Nelson）が指導する実験的な教育プログラムに参加した。そこでドリーンから、新しい都市のための建物をデザインするように言われたという。

1

1
キム・コリン（左）とサム・ヘクト。「ふたりの考え方や仕事の進め方はあまりに異なっているため、プロジェクトに向き合う時は互いに自分の意図を相手に詳述しなければなりません。常に説明し、正当性を証明する立場に置かれるのは、外部に対してと同じくらい、内面を深く見つめることを意味します」とヘクトは語る。

2

2
スタジオの一角で使われている無印良品のシェルフ。

3
ミーティングスペースでは数種類の椅子が使われている。アルミニウム製の椅子は、ハンス・コレーが1938年にデザインした「Landi chair」。

「典型的なLAのやり方で、彼女は私にとって何が可能であるかのモデルになってくれました。彼女は建築家であり、ディレクターであり、映画製作者であり、そして何よりもアイデアにあふれる女性でした。その時の体験が私に大きな影響を与えたのは確かです」

建築の深遠さから捉えるデザイン

ヘクトはロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートを修了後、デザインよりも建築にかかわりたいと考え、デイヴィッド・チッパーフィールドの事務所に勤務する。やがてデザインファームのIDEOを創業する前のビル・モグリッジと知り合い、ハーバード大学での共同研究を打診された。「君のアプローチはあまりに直接的で本質的すぎるから、プロダクトデザイナーには向いていない」とモグリッジから言われたそうだ。その後、1991年に創業したIDEOのメンバーとしてサンフランシスコで働き、同僚となった深澤直人と親交を深めた。そして1996年、IDEO東京支社を深澤が開設する際に、彼に誘われてヘクトもそこに参加する。

3

4

4
多くの模型や実物大の試作品が、無印良品の収納ボックスも活用して保管されている。

5
インダストリアル・ファシリティがデザインした無印良品のロングセラー、「パスポートメモ」。
Photo: Angela Moore

6
工房で使っているマティアッツィの椅子「Radice」。壁面にはイームズ夫妻によるレッグスプリントが見える。

5

6

「アメリカは商業的な物事が中心で困惑することが多かったのです。東京は別のやり方を試すチャンスだと思いました。私たちは、未来的になるのではなく、現代のリアルな世界を見て、本質を提案しようと考えていたのです。また私にとって、日本での仕事は企業のエンジニアと共にいることで多くの学びを得る機会になりました。彼らがどのようにテクノロジーを開発し、機能させるのかを見て、自分自身が知識をもつことの大切さに気づかされました。エンジニアリング、経済、アート、科学、マーケティング、すべてに関する知識です」

３年後にヘクトはロンドンに移り、コリンと出会う。彼女はアメリカで建築を修めた後、ジャーナリストとして活動し、ロンドンの建築学校AAスクールの教師でもあった。

「最初の会話から、サムと私はクロスオーバーについて話しました。ごく簡単に言えば、彼は常に建築に興味がありながらデザインを実践していて、私はデザインに興味がありながら建築の分野で活動していました。ふたつの領域の違いや、それぞれに関連する哲学について、私たちはたくさん語り合った。そして、プロダクトは建物と同じように決してコンテクストなしに存在しえないという前提で、一緒にスタジオを設立しようと決めたのです。こうした考えに基づいて発想していくデザインスタジオには、当時まだ多くの手つかずの領域がありました。私たちはふたりとも、オブジェクト単体ではなく、オブジェクトといかに生活するかに関心がありました」

それに対して、ヘクトは話す。

「私にとって建築は、デザインよりも興味深いものでした。建築は実際に完成していなくても、その考え方について哲学的な議論ができる。一般に、デザインに比べてプロセスが複雑で深遠です。キムと出会った時、私は今こそ建築のプロセスをデザインに持ち込む試みをするのに絶好のタイミングだと感じました」

匿名性と無印良品

ヘクトとコリンがインダストリアル・ファシリティを設立したのは2002年。当時のデザインシーンは何かと騒がしかった。新奇さを競うような家具がメディアを飾り、ミラノサローネが祭典としての色合いを増しつつあった。そんな時期において、直訳すると「工業設備」「産業機関」となるネーミングは、かなり異色だったはずだ。その由来を、サムはこう説明する。

キッチンツールブランド、Taylor's Eye Witnessから2003年に発表した「Chantry Knife Sharpener」 と、2005年にデザインした無印良品のグラスシリーズ。

7

8

9

10

11

12

13

14

7
マティアッツィの椅子「Stelo」。伝統的なウィンザーチェアを再解釈している。

8
エメコ(Emeco)の「Run Day Bed」。

9
ハーマンミラーの「OE1 Freestanding Curtain」。
Photo: Fabian Frinzel

10
5ポンド以下の雑貨を観察するプロジェクト「Under the Fiver」より。「ミラノサローネと同じくらい、100円ショップからも学ぶべきことはたくさんあります」とヘクト。
Photo: Angela Moore

11
スウェーデンのヴァストベリ(Wästberg) の照明器具「W182 Pastille」。

12
フットスイッチで昇降する、ハーマンミラーの「OE1 Sit-to-Stand Table」。
Photo: Fabian Frinzel

13
フューチャー・ファシリティとして手がけた「Posting Card」。電子ペーパーディスプレイに知人から送付された画像を映し出すもので、ソーシャルメディアの代替手段となる。
Photo: Industrial Facility

14
デンマークの&Traditionから昨年発表した椅子「Kape」。
Photo: Industrial Facility

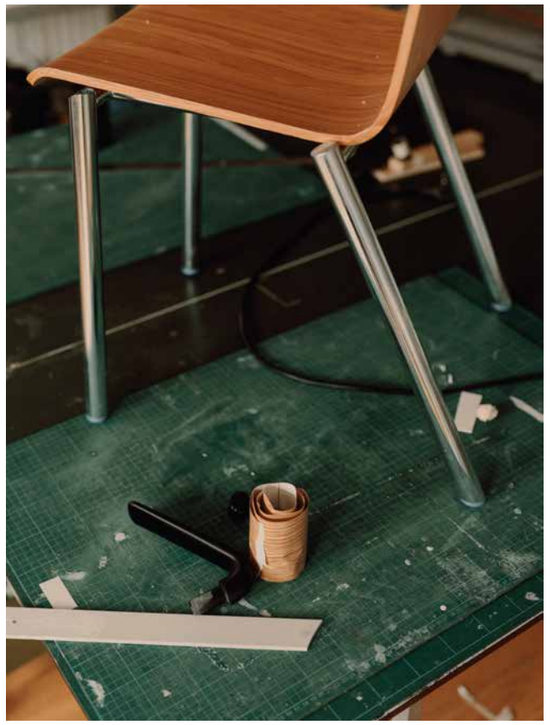
15
NIIのオフィス向けの多目的チェア「Hakusan」のディテール。パーツのフォルムや太さは、触れるというアナログな感覚を意識している。
Photo: Industrial Facility

16

「この命名にはいくつかの理由がありましたが、ひとつは無意味であることです。漠然としたふたつの単語を組み合わせただけで、その匿名性が気に入りました。また当時の私たちは日本の明和電機に夢中でした。彼らは日本企業のスタイルを模倣してアーティスティックな活動を行っています。とても素敵なアイデアだと思いました。このような企業名なら、1000人もの従業員がいるかもしれないし、数人かもしれない。何も予測できません。意味のない名前なので、あらゆるタイプの企業と対話できるとも考えました。IBMの正式名のインターナショナル・ビジネス・マシーンズのように」

こうしてスタートしたインダストリアル・ファシリティが最初にクライアントとした企業のひとつが「無印良品」だったのは、興味深い偶然だ。現在まで続くその仕事は、ふたりにとってとても重要だったと、コリンは述べる。

「自分たちに厳しい制約を課し、よりよい製品を追求すると共に、無印良品とは何かと常に自問自答する姿勢がとても好きです。当たり前のように聞こえますが、製品すべてが自分たちの価値観を反映しなければならないと考える企業は決して多くありません」



17

またヘクトにとって無印良品は、製品とコンテクストの間にフィルターがないことが稀有なのだという。

「多くのブランドが派手な色、強いグラフィック、特別なブランディングを必要とするのは、ユーザーを説得するためです。無印良品の製品は無印良品の店舗で購入されるので、手に取ってもらうように大声で主張しなくていい。この仕組みが、ユーザーと製品との本当の対話を可能にしています。ただし本質が重要だからこそ、無印良品のためのデザインは、難しいのです」

16
スタジオのミーティングスペース。ペンダントライトはインダストリアル・ファシリティがデザインしたサンタ&コールの「Vaso」。

コラボレーションから見えるもの

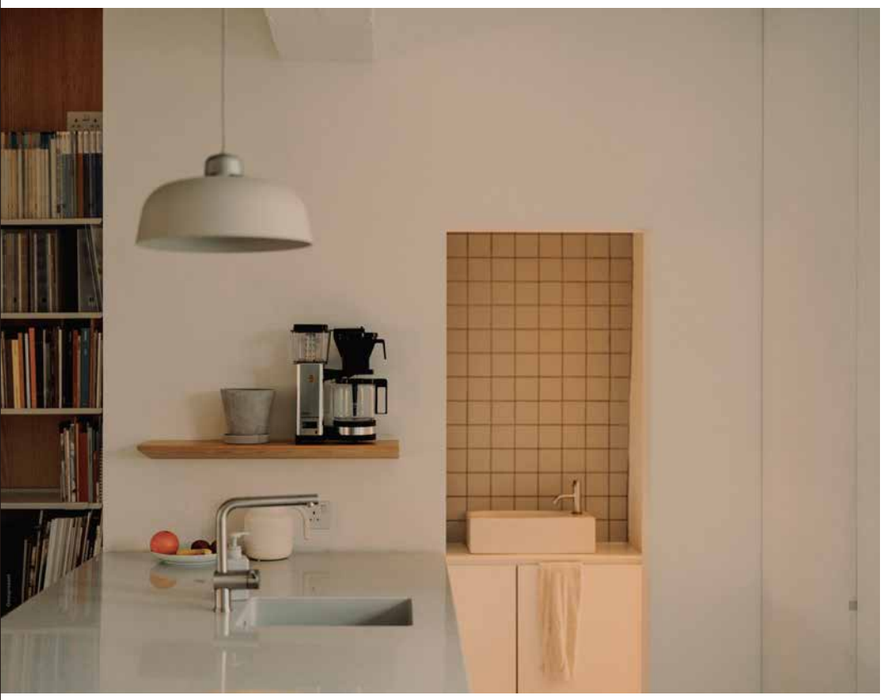
アメリカのオフィス家具ブランド、ハーマンミラーとの仕事も約20年にわたって続いている。ヘクトとコリンの自宅での暮らしぶりから明らかなように、彼らはハーマンミラーの製品を数多く愛用している。「私たちがハーマンミラーをよく理解しているという

最初からサムと私はクロスオーバーについて話しました。彼は常に建築に興味がありながらデザインを実践していて、私はデザインに興味がありながら建築の分野で活動していました。

18

17
スタジオ内のワークショップでは、実際に素材を扱って試作をする工程を続けている。

18
Asusから発表したデジタルデバイス「SUSA」は、ドット状のディスプレイによって意図的に解像度を下げ、人とテクノロジーの関係性の適正化を図った。
Photo: Future Facility



19

意味で、それは無印良品に似ています。ハーマンミラーの製品をデザインするのは、自分自身に向けてデザインするようなもの」とヘクト。ただし一方で、デザイナーとしてはクライアントのためにオフィスの課題を十分にわきまえなければならない。現在のワークスペースには大きなふたつのテーマがあるのだと、彼は解釈している。

そのひとつは、特に若い世代にとってオフィスを「行きたくなる場所」にすること。ヘクトたちの世代にとって働くことは、収入を得て生計を立てるための行為であり、代償としてある程度の不都合を受け入れることに抵抗はなかった。しかしそんな意識に変化が起きているという。

「仕事を通して自分らしく生きたいという人が増えています。だからフルタイムよりもパートタイムを好み、自宅で仕事できるならそのほうが望ましいと考える。でも実際は、仕事やオフィスが快適で、目的に適っていれば、生産性やウェルビーイングは高まります。私たちは実践を通じて人々をオフィスに呼び戻す必要があります」

もうひとつの課題は、世界がますますデジタル化していることだ。ディスプレイの向こうの空間のほうが現実よりも価値があるように、誰もが知らず知らずのうちに感じるようになってきた。デジタル技術の発達はますます生産性を高めていくが、人間はもちろん住空間や日用品がアナログであることは変わらない。

「アナログな空間が私たちにとって不可欠であることを示し、体感してもらわなければなりません。デジタルにおいて生産的であるためにも、アナログを充実させるべきなのです」

19
スタジオ内のキッチン。ペンダントライトはインダストリアル・ファシリティによるヴァストベリの「Dalston」。

20
NIIの椅子「Hakusan」。アームチェアでありながら座る人の自由な姿勢や動きを妨げない。スタッキングのしやすさや持ち運びしやすさにも配慮した。
Photo: Industrial Facility

21
サム・ヘクトとキム・コリンは、プライベートでもパートナー。

20

イタリアのマティアッツィ（Mattiazzi）の家具は、そのような点でアナログに振り切ったデザインと言えるだろう。ファイドンから発売されているインダストリアル・ファシリティの充実したモノグラフ『Industrial Facility』（2018）の表紙を飾ったのもマティアッツィの椅子「Branca」だった。もともと木工家具の製造業者で、2009年に本格的に家具ブランドとして始動したこのブランドについて、コリンはこうコメントする。

「彼らは、私たちの価値観を宿した椅子、そして『マティアッツィだからこそ高度に実現できる』と理解できる椅子を求めます。また自社工場をもっているため、それぞれの開発に生かすべき世代を超えた専門知識があります。ハイテクであると同時に手仕事に献身的であり、デザイナーをファミリーとして新しい場所へ導こうとしているのです」

またインダストリアル・ファシリティの最新作に、日本の新しいオフィス家具ブランド、NIIのために手がけた椅子「Hakusan」がある。オフィスでの使用を前提にしているが、その空間のあり方は実際はとても幅広い。デスクワークがあり、ミーティングがあり、いろいろなコミュニケーションがあり、飲食や休息の場にもなる。Hakusanはどんな場面にも適応し、空間から空間への移動もしやすい。

「この椅子についてもいつもと同じように、使用されるコンテクストを重視しました。アームレストがありながら、座る人に対して制約をもたらすことのない形をしています。長時間にわたって座り続けるミーティングでは、姿勢を変えやすい椅子のほうが疲労を低減します」

21